潮 騒

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
潮　騒

【Ｎコード】
Ｎ３２０９Ｎ

【作者名】
聖騎士

【あらすじ】
愛しているからといって、愛されるとは限りませんよね。【恋愛短編小説企画「アイコトバ」参加作品】

（前書き）

【恋愛短編小説企画「アイコトバ」参加作品】

恋に関する格言や諺を元にした短編小説を書くという企画です。（主催：桜庭春人　様）

＜選択した格言＞

「難しいのは愛することではなく、愛されることである」　（Johann Wolfgang von Goethe）

初夏の海辺は潮の香りに包まれ、水平線を過ぎる船の影を蜃気楼のように揺らめかす。きらめく陽光を反射した海面では白い波頭が崩れ、砂浜につけられた子どもたちの足跡を消し去っていく。次第に強くなってくる陽射しを受け、一羽のかもめが岸壁を上昇していく。若草に埋め尽くされた崖の上には、白い二階建ての木造建築が海風と陽光を受けてまぶしそうに佇んでいる。

特別養護老人ホーム「しおさい」は、まもなくお昼時を迎えようとしている。車椅子を押す白衣の職員たちが、機械的に老人たちをテラスへと運んでくる。

「作造さん、今日は顔色いいですね」

「ヨネさん、今日は残さず食べてくださいね」

一人ひとりていねいに声をかけながら、この施設で一番若い介護士である桐生紗江子はトレイに載った昼食をテーブルへと並べていく。彼女は介護士になって三年目、ようやくこの仕事にもやりがいを見つけられるようになってきた。しかし今年の末には退職することになっている。五年間の大恋愛の末、愛する彼と結婚することが決まったからだ。

「はい、ゆっくり食べてね」

紗江子は一人の老婆の歯のないしわだらけの口へ、柔らかく煮込んだおかゆをスプーンで運ぶ。三回に一回はこぼしてしまうため、前掛けは必須だ。そうしている間にも、老婆はクリーム色の前掛けにこぼしてしまう。

「もう一回食べてくださいね」

紗江子は気にする風もなく、笑顔でおかゆを掬う。仕事を始めた頃は、何事も上手くいかず、毎日落ち込んでばかりいた。基本的にまっすぐな性格の紗江子は、ちょっとしたことですぐ自分を責めてしまっていた。こういった施設へ預けられるお年寄りたちは、自分

で身の回りのことができない人が多い。まだ何もわからなかった紗江子は、赤ん坊の世話をするように接して、先輩介護士に注意されたものだった。

「お年寄りは人生の大先輩。尊敬の気持ちがなければこの仕事はできないわよ」

紗江子はその言葉を聞いて衝撃を受けた。自分で着替えや食事ができなくても、言葉が不明瞭で下の世話が必要でも、お年寄りたちはこの国を支えてきた人生の大先輩たちだ。紗江子の中でそう意識改革ができた時、仕事がとてつもなくおもしろくなってきた。それなのに辞めなければならない。

「僕のそばにいてほしい」

彼はそう言って紗江子の髪を優しく撫でた。彼は大手商社のビジネスマン。来年から三年間、ドイツ支社に出向することになっている。新婚早々単身赴任で離れるのは嫌だと彼は言い、紗江子自身も愛する彼と離れるのは嫌だった。そして彼一人の収入で十分やっていけるが、紗江子の薄給では一人暮らしさえままならない。ということで、必然的に紗江子が仕事を辞めざるを得なかったのである。

「さえちゃん、山際さんのお散歩お願いできるかな」

先輩介護士の高利が食器をワゴンに片付けていく。この施設では職員が交代で、わりと軽い症状のお年寄りを車椅子で散歩に連れ出すカリキュラムがある。今日は高利が山際タエという八十才のお婆ちゃんを散歩に連れて行く当番だった。しかし高利の担当している別のお年寄りが風邪をこじらせて具合が悪く、今日は目が離せない状況らしい。

「いいですよ」

今日は散歩の当番が入っていない紗江子は、二つ返事で了承する。紗江子は散歩が好きだった。

風が杉林を揺らし、心地よいざわめきが通り抜けていく。深緑に萌える崖の道を、紗江子は車椅子を押しながらゆっくりと歩く。海

風が潮の香りを乗せて紗江子と老婆の麦わら帽子を揺らす。紗江子はこの瞬間が大好きだ。

学生時代はバレーボールに打ち込んで、恋愛にはあまり縁のない青春時代を過ごした。短大に入学して最初の合コンで知り合った彼と出会うまで、キス一つしたことはなかった。五つ年上の彼は、高校を出たばかりの紗江子にはとても大人に見えた。彼はとても優しく、話題も豊富で気配りに長けていた。紗江子が夢中になるのにさしたる時間は必要なかった。恋愛の駆け引きなどまったく知らない紗江子のわがままも、彼は広い心で受け止めてくれた。紗江子は心から彼を愛している。そして紗江子も彼の愛を心から信じている。だからこそ彼のプロポーズを受けたのだ。

「タエさん、寒くないですか」

タエはしわだらけの白い頬を緩ませ、ほっこりと微笑む。紗江子は自分の母親よりも高齢なこの老婆に好意を抱く。紗江子の母親はこの結婚にいい顔をしていない。彼のことは良縁だと認めてくれてはいるが、仕事を辞めて異国の地へ行くことには反対しているのだ。母は、彼と三年間離れて暮らすことになってもいいから仕事だけは続けなさいと言う。紗江子は実家へ帰るたびに母にそう言われ、少々うんざりしていた。

「海が見たい」

タエのか細い声が潮騒といっしょに紗江子の耳に響いてくる。紗江子は顔にかかる遅れ髪を耳に掛けながら明るく了承する。

崖の道は緩やかに岬へ向かってカーブしている。少々上り坂になっているため、紗江子はタエと会話をすることもなく腕に力を入れて押していく。タエの細い身体は車椅子よりも軽いだろうが、それが上り坂ともなるとそれなりに重い。紗江子の額に少し汗が浮き出る頃、海に出た。

午後の明るい陽射しを受けて、青く輝く海は広々として気持ちがいい。強い海風に帽子を飛ばされないよう気を遣いながら、紗江子は見晴らしのよい場所まで移動する。岬はちょっとした展望台のよ

うになっており、白いペンキの塗られたベンチや公衆トイレ、簡単な東屋がある。崖の端には白い百合の花が一輪、海風を受けて気持ちよさそうに揺れている。その手前にある木を組んで作られた手すりの前には観光客らしき家族連れがいて、就学前ぐらいの男の子が海を指さして父親と楽しそうに笑っている。ベンチには若いカップルが穏やかな表情で海風に吹かれて並んで座っている。紗江子は家族連れより少し離れたところで、タエが海を見やすいように車椅子をつける。ストッパーをかけると、擦れて少し熱くなった手のひらを持ち手から放して海風で冷やす。

空にはちぎれ雲が一筋風に流されていく。遠く水平線にはタンカーらしき薄ぼんやりとした小さい影が、止まっているかのようにゆっくりと横切っていく。下方からは岸壁に弾ける波の音が規則的に聞こえ、興奮して話をする男の子の声が時折混じる。

「あなたは」

「え」

風の唸る音かと錯覚するほど、それはかすれたか細い声だった。

「ご結婚されるんですってね」

錯覚ではない代わりに、確かにタエは紗江子をしわに埋もれた目で見つめている。その目はすべてを優しく包み込むように深い。紗江子はタエの優しい目に応えるように顔を綻ばせ、頬を桃色に染めながら頷く。

「ええ」

タエは視線を水平線へ移し、ちぎれ雲が空の端に移動するまでの間じっと見つめている。

「ここは昔、なにもない岸壁でした」

海風に乗って運ばれて来たかように、タエの声が不意に耳に入る。紗江子は車椅子の横にしゃがみ、タエと視線の高さを合わせる。

「ここに来たことあるんですか」

タエは微笑んでいる。しかし泣きそうな顔に見えるのは老婆だからなのだろうか。

「私は東京の下町で理髪店の次女として生まれました……」
ゆっくりと、そして丁寧にタエは話し始めた。

私は東京の下町で理髪店の次女として生まれました。裕福ではありませんでしたが、学校に通う余裕ぐらいはあるごく普通の家庭に育ちました。姉は私より二つ年上で、三年前に亡くなりました。長いこと胆石を患っていたのです。

私たち姉妹はとても仲のよい姉妹でした。学校に行くときは、いつも姉に手を引かれて通っていました。私は勉強が好きで、特に算数が大好きでした。当時はまだ女性が大学へ進学するのは難しい時代でしたが、それでも私は大学へ進学して数学の先生になるという夢を持っていました。しかし今でいう中学校を卒業した後、戦争が始まりました。

開戦直後こそ戦勝ムードで、毎日お祭り騒ぎでした。そんな中、私はあの人と出会いました。彼はうちの店によく髪を切りに来るお得意さんで、私より五つ年上の兵隊さんでした。目鼻立ちが整ったそれはとても凛々しい男性で、私は密かに憧れていました。戦争が始まってからも彼は時々店へと顔を出し、私は店の手伝いをしながら彼と話をするのが楽しみでした。思えばその頃からすでに、私は彼に恋していたのかもしれません。

ある日、私は彼にプロポーズされました。戦争が始まってしまったため大学進学をあきらめていた私は、喜んで受け入れました。結婚式は町の神社で挙げました。とても質素でしたが、幸せでした。私たちは小さな家を借りて暮らし始めました。彼はとても優しく、私はご飯を作って彼の帰りを待つのが毎日楽しくて仕方がありませんでした。慎ましくも幸せな日々。しかしそんな私の幸せは、長くは続きませんでした。彼が満州へ出兵することになったのです。戦況は思わしくなく、私は彼が行ってしまったらもう二度と会えないような気がして毎日泣きました。でも彼はこう言ったのです。

「必ず生きて帰ってくる。だからタエちゃん、待っててくれますか」

と。私は彼を泣く泣く見送り、帰りを待ちました。彼はきっと帰って来る。そう約束したじゃない。必ず帰って来る。私は彼の帰りを指折り数えて待ちました。しかし戦争が終わっても、彼は帰って来ませんでした。あなたぐらいの若い方はご存じないかもしれませんが、戦死するとその遺族の元には知らせが届くんです。彼の戦死を知らせる葉書は、私のところへ届きませんでした。つまり彼は生きている。でも帰って来ないんです。

私は待ちました。焼け野原になった東京で塾を開き、子どもたちに算数や漢字を教えました。一年経ち、二年経っても、私は彼が戻ってくるまで待ちました。彼の笑顔、私の作ったご飯をおいしいといって食べてくれたあの頃。子ども好きな彼は、将来子どもは三人は欲しいと言っていました。私は来る日も来る日も夢見ていました。いつか彼がひょっこり帰って来て、あの笑顔を見せてくれることを。私の作ったご飯を食べておいしいと言ってくれる声を。彼と私と三人の子どもたちでの幸せな生活を。

でも彼は帰って来ませんでした。いっしょに満州へ行った兵士の方に話を聞いてもわかりませんでした。そして月日は流れ、東京の街並みもだいぶ復興したある年の冬。私は彼を見つけました。少し年老いてはいたけれどそれは私も同じ。私はひと目見て彼だとわかりました。私は駆け出そうとしました。でもその足を前には出せませんでした。

彼は小さな男の子の手を引いていました。そしてその男の子のもう一方の手は、きれいな女性とつながれていました。いくら私でもその光景を見ればわかります。男の子は彼とその女性によく似ていました。私はその場に立ち尽くし、彼と彼の家族から目を離せませんでした。心臓の音だけが大きく響き、全身の力が抜けていくのがわかりました。そして彼と目が合いました。彼も私だとわかったのでしょう。大きく目を見開きじっと私を見つめていました。不審に思った男の子が「パパ」と言いました。その瞬間、私は彼から逃げるように走り出してしまいました。何も考えられませんでした。た

だ夢であってほしい。彼は今も私を愛していて、何らかの事情で満州から帰って来られないだけ。今も私のところへ帰りたいと思っているはず。そう願うばかりでした。

私は塾を知人に任せ、母の実家があるこの地へ引っ越して参りました。もう東京にはいたくなかったのです。実はこの場所は、彼と初めてデートした場所でした。

結婚前、私が前日の夜から仕込みをしたお弁当を持って、ここで海を眺めながら彼といっしょにお弁当を食べました。この場所は思い出の場所なんです。今はこんなにきれいな公園になってしまったけれど、昔は一面に草の生える原っぱでした。タンポポがきれいに咲いていたのを覚えています。私と彼は、海風に揺れるたんぽぽを見て笑い、遠く聞こえる潮騒に耳を澄ませてお昼寝をしました。彼の温もりを膝に感じながら、私は彼の子どものような髪の毛をずっと撫でていました。

ここに越して来てからも彼のことを忘れることはできませんでした。そしてある日、彼が私の前へ現れました。そう、ちょうど私はこの辺に立っていました。潮騒を聞きながら海を眺めていたら、彼が息を切らせて走ってきたのです。私は涙が出るほど喜びました。彼は私のところへ戻ってきてくれた。お互い遠回りをしたけれど、これからやり直せばいい。これから幸せになれればいい。そう思って彼の胸へ飛び込みました。

しかし彼は私の肩を抱いて一言「ごめん」と言いました。私は「謝らなくていいわ、これから二人でやりなおしましょう」と言いました。彼は悲しそうに目を伏せ、家族を愛している。君といっしょになることはできない、と言いました。彼の言った「ごめん」とは、そういう意味だったのです。

彼は満州で一人の看護婦と出会いました。日本から従軍していった看護婦です。彼と看護婦は満州で恋に落ち、子どもまでもうけました。空襲で私との婚姻を証明するものは焼け、彼は彼女と改めて結婚したのです。

私は彼の話を静かに聞きました。私のご飯を「おいしい」と言ったその声で、そんなことを蕩々と話すのです。私は自分で自分が消えていくような、そんな気さえしました。今自分は立っているのか、座っているのか、起きているのか、これは夢なのか。気づけば私の口は自然に動いていました。

「あなたを許してあげるわ。その代わりにあの百合の花を取って。あなたの思い出の代わりにあの百合の花が欲しいの」

その百合はそこの崖の端に白く美しく咲いていました。あの百合の花のように。彼は頷いて百合の花を摘みに行きました。私はその時の記憶がまったくありません。ただ覚えているのは、驚愕の表情で崖から落ちていく彼の顔です。私は両手をまっすぐ突き出したまま、海風に吹かれて潮騒の音をずっと聞いていました。

紗江子の耳に潮騒が戻って来る。沖合のタンカーの影は、今まさに水平線の向こうへ消え去って行こうとしている。

「タエさん、あなたは今幸せですか」

タエは何も言わず、目尻のしわを深くする。紗江子はふとある言葉を思い浮かべる。

『難しいのは愛することではなく、愛されることである』

確かゲーテの言葉。人は愛することによって、愛されることを求める。自分は愛されるに足りる女なのだろうか。彼は愛するに足りる男性なのだろうか。自分と彼は、愛し続け、愛され続けられるのだろうか。

タエの罪の告白は、紗江子の心に重くのしかかる。普段微笑んでいるだけで無口なタエが、なぜ自分にこんなことを話したのかその真意はわからない。

ただ風に揺れる百合の花は幸せそうな家族連れや若いカップルの前で、今も変わらず海風と潮騒に包まれている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3209n/

潮 騒

2010年10月8日14時20分発行